

M-GTA 研究会 News Letter No.102

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（株式会社アクセライト内）

メーリングリストのアドレス：members@m-gta.jp

研究会のホームページ：http://m-gta.jp

世話人：阿部正子、伊藤祐紀子、唐田順子、菊地真実、倉田貞美、坂本智代枝、佐川佳南枝、隅谷理子、竹下浩、田村朋子、丹野ひろみ、都丸けい子、長山豊、根本愛子、林葉子、宮崎貴久子、山崎浩司（五十音順）

相談役：小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾（五十音順）

<目次>

◇第13回修士論文発表会報告

【中間発表】..... 3

内野 真由美：精神障害のある当事者家族の支援に関する研究—セルフスティグマが低減するプロセスに着目して—

【成果発表】..... 16

山田 美保：日本語を主専攻とする台湾の大学生が日本語教師に期待すること—日本語教師との関係性形成プロセスから—

◇近況報告.....28

山本 江里子（母性看護学・助産学領域／若年女性、月経異常、尺度、婦人科受診）

◇次回のお知らせ.....28

◇編集後記.....28

◇第13回修士論文発表会報告

【日時】2020年9月5日(土) 13:00~16:30

【場所】オンライン(ZOOM)

【申込者】124名

赤畑淳(立教大学)・浅川雅美(文教大学)・朝日まどか(北海道医療大学)・阿部正子(名桜大学)・荒川博美(国際医療福祉大学)・荒木善光(熊本保健科学大学)・安齋久美子(帝京科学大学)・安藤晴美(山梨大学)・飯嶋友美(群馬大学)・飯村愛(日本女子大学)・池田稔子(日本赤十字看護大学)・池田紀子(ルーテル学院大学)・石橋曜子(国際医療福祉大学)・磯野洋一(京都先端科学大学)・井潤知美(大正大学)・伊藤祐紀子(長野県看護大学)・岩田好司(久留米大学)・石見和世(帝京大学)・上野千代子(京都先端科学大学)・内田貴峰(埼玉医科大学短期大学)・内野真由美(大正大学)・江口賀子(西九州大学)・大久保明子(新潟県立看護大学)・大友秀治(北星学園大学)・小川直美(愛知県立大学)・奥田孝之(奥田技術士事務所)・小倉早苗(東京福祉大学)・小沢日美子(同朋大学)・小澤景子(早稲田大学)・小畑美奈恵(早稲田大学)・片桐準二(ベトナム日本文化交流センター)・唐田順子(国立看護大学校)・川口真澄(法政大学)・菊地彩花(聖路加国際大学)・菊地真実(帝京平成大学)・菊原美緒(防衛医科大学校)・岸野あやか(国際医療福祉大学)・岸本桂子(昭和大学)・木下康仁(聖路加国際大学)・木村和美(和歌山県立医科大学附属病院)・倉田貞美(浜松医科大学)・栗田真由美(静岡県立大学)・栗田麻美(奈良県立医科大学)・黒須依子(九州保健福祉大学)・小島好子(自治医科大学附属病院)・後藤喜広(東邦大学)・小林陽介(自営業)・小山道子(日本医療科学大学)・小山多三代(東京外国語大学)・坂本智代枝(大正大学)・櫻井理恵(千葉県立保健医療大学)・志岐和紀(佛教大学)・重富勇(長崎県立大学)・篠崎一成(放送大学)・篠原実穂(帝京平成大学)・島田祥子(東京医療保健大学)・清水弘美(新潟医療福祉大学)・下野史子(順天堂大学)・正田温子(早稲田大学)・鈴木泰子(抱生会丸の内病院)・鈴木まなみ(群馬大学)・鈴木祐子(人間総合科学大学)・鈴木和子(宮城県大和町役場)・鈴木聡子(千葉大学)・鈴木博夫(筑波大学)・住吉智子(新潟大学)・園川緑(帝京平成大学)・高祐子(複十字病院)・高橋はる(国際医療福祉大学)・高橋国法(東京都市大学)・滝口美香(富士吉田市立看護専門学校)・谷口あけみ(聖マリア学院大学)・玉川久代(京都橘大学)・田村朋子(清泉女子大学)・千葉洋平(岐阜薬科大学)・千葉文(横浜国立大学)・塚原美穂(新潟県立看護大学)・土澤元太(札幌国際大学)・デイヴィス恵美(大阪成蹊大学)・常盤洋子(群馬大学)・都丸けい子(聖徳大学)・鳥居千恵(浜松市立看護専門学校)・永田夏代(湘南ユニテック)・永松有紀(産業医科大学)・長山豊(金沢医科大学)・根本愛子(東京大学)・根本ゆき(防衛医科大学校病院)・野崎理菜(金沢医科大学)・野瀬由季子(大阪大学)・橋本友美(東京都立大学)・畑中大路(長崎大学)・濱谷雅子(東京都立大学)・林葉子((株)JH産業医科学研究所)・比嘉昌哉(沖縄国際大学)・平川美和子(弘前医療福祉大学)・平塚克洋(上智大学)・広瀬安彦(野村総合研究所)・廣田奈穂美(筑波大学)・夫博美(大阪信愛学院短期大学)・藤江慎二(帝京科学大学)・船木淳(神戸市看護大学)・堀口美奈子(高崎健康福祉大学)・前野真佐美(金沢医科大学病

院)・松戸宏予(佛教大学)・松元悦子(山口県立大学)・宮崎貴久子(京都大学)・望月瞳(越谷市教育センター)・矢口修一(埼玉大学)・柳井康子(東京都公立学校)・柳澤理子(愛知県立大学)・山内真紀子(弘前医療福祉大学)・山崎浩司(信州大学)・山田美保(名古屋外国語大学)・山田勝美(山梨県立大学)・山田典子(日本赤十字秋田看護大学)・横井優子(岐阜聖徳学園大学)・横森愛子(山梨県立大学)・横山和世(国際医療福祉大学)・横山豊治(新潟医療福祉大学)・吉羽久美(東京都立大学)・渡邊久美子(東京福祉大学)・渡部亜矢(筑波大学)・渡辺隆行(東京女子大学)・渡邊節子

【第1報告】

内野真由美 (大正大学大学院人間学研究科社会福祉学専攻修士課程二年)

Mayumi Uchino: Taisho University Graduate School of Humanities Department of Social Welfare Master's course 2nd year

精神障害のある当事者家族の支援に関する研究

ーセルフスティグマが低減するプロセスに着目してー

Study on Supporting Family of Persons with Mental Illness -Focusing on the process of reducing self-stigma-

1 研究背景

1) 研究の動機

本研究に取り組む動機は、筆者の精神科病院における PSW としての実践からの問題意識に基づくものである。精神障害のある当事者家族は、セルフスティグマを抱くことで、精神疾患やその症状によって起こる困りごとを家族内で抱え込み、孤立し、地域との交流や社会参加の機会がたたれ、医療・福祉サービスを十分に受けられない等の現状があるのではないかという問題意識を持った。そこで精神障害のある当事者家族の抱くセルフスティグマに着目し、研究に取り組み始めた。

2) 我が国における家族の置かれてきた歴史

我が国において精神障害のある当事者家族が置かれてきた制度的背景は、1900 年の精神病患者監護法に定める「監護義務者」にまで遡る。戦後、1950 年に「精神衛生法」が制定されて以降、精神障害者の「医療及び保護」を目的に掲げる非自発的入院制度の根幹に「保護義務者」制度が設けられてきた。家族は、この「保護義務者」として治療を受けさせる義務、自傷他害監督義務等を負うこととなる。1999 年の精神保健福祉法改正時に、自傷他害防止監督義務が削除され、自らの意思で通院する者や任意入院者については治療を受けさせる保護者の義務が免除されたが、その他の者に対して保護者が治療を受けさせる義務等はその後とも存続していた。2013 年の精神保健福祉法改正で、形式的に「保護者」の名称は廃止

されたものの、「家族等」の同意による医療保護入院制度は存続し、本質的には何も解決しておらず、精神障害者の家族は、今なお大きな負担を背負っている（古屋 2019）。

3) 家族研究の歴史

家族研究については、アメリカの精神分析学派 Fromm-Reichmann（1948）の統合失調症等の精神疾患の発症に家族が影響しているという「家族病因論」に基づいたものが始まりであった。1950年代後半頃のイギリスでは、Brown ら（1972）が統合失調症の再発率の高さを検証するために「家族関係」の測定方法として「感情表出（Expressed Emotion）」を開発した。1980年代からは、心理教育や SST（Social skill training）が体系化され、1990年代からは、家族自身が問題を解決する力を持っており、その力を引き出す（エンパワメントする）という考えが受け入れられるようになった（佐藤 2006）。これまでの家族研究の流れから、家族は病因から治療及び支援の対象へ変化していることがわかる。

4) 精神保健福祉領域のスティグマに関する研究

精神保健福祉領域のスティグマに関する研究については、スティグマが、精神障害者やその家族のセルフ・エスティームの低下、社会的ネットワークの減少、住宅問題、余暇活動、保険、就労の困難などに関係しており、それが社会的排除や社会的孤立とつながっている（山口・米倉ら：2011）ことが示されている。その他にも、本人のスティグマに関する研究（下津・堀川ら：2005、半澤・中根ら：2008、吉井：2009、関根：2010、林・金子ら：2011、山口・米倉ら：2011、山口・木曾ら：2013、嶋本・広島ら：2014、山口・吉田ら：2014、横山・森元ら：2014、ヒーザー・スチュアートら：2015、山田：2015、小松：2016、長田・福嶋ら：2016、吉井：2016、盛本・松田ら：2017）は多い。しかし、家族のスティグマに関する研究は、知的障害者家族に関する研究（藤井：2000）が1件見受けられたが、精神障害者家族に関する研究は少ない。そこで本研究では、精神障害のある当事者家族が抱くセルフスティグマについて着目する。

2 先行研究

1) 家族支援に関する先行研究

精神障害のある当事者家族自身に焦点を当てた研究では、中・高年期にある家族は「将来に対する不安」以外に、「仕事・家事ができない」「心身ともに疲れる」といった「家族自身の生活上の困難さ」を抱える傾向にある（栄 1998）ことや、精神的な健康が保たれていない家族は、自分の人生に注目する力が弱まる（松田ら 2019）ことが示され、大島ら（2000）は、「援助者としての家族」であると同時に、「生活者としての家族」として存在することの重要性を述べている。さらに、得津（2015）は、家族レジリエンス概念は「個人 - 家族 - （親戚・近隣などの家族のような）コミュニティー - 社会・自然環境」のそれぞれのシステムを文脈として、「家族に潜在するストレングス」、「それを発揮させる外界との交流」の座

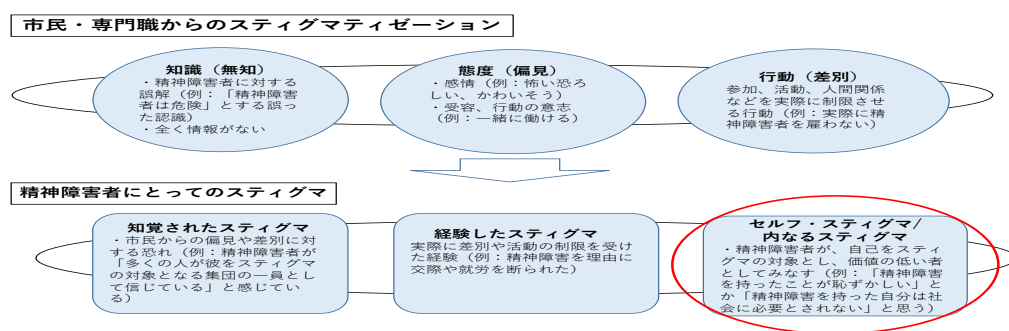
標に「時間（歴史、発達）・空間（場）」を加えた次元モデルであり、そのモデル上で展開される「関係性」と「回復以上の回復」と全体的な動きとの相互作用をするプロセスであることを示しており、家族が閉じたシステムとならないように絶えざる外部との交流が不可欠であることの重要性を述べている（得津：2010）。家族の回復に関する研究では、精神障害者を介護する家族の **wellbeing** を改善するためには、家族心理教育による個人的方策だけでは十分ではなく、セルフヘルプ・グループの仲間話を聞き自らの経験の意味づけを問い直す「経験評価」として影響を及ぼし、同時に、家族関係の強化、専門家による地域生活支援の充実、地域社会の偏見差別を改善し、周囲の人々が気軽に手を貸そうとする精神障害者への認識の育成などにより「媒介因子」であるソーシャルサポートの影響を受けることが示唆されている（半澤 2005）。さらに川添（2007）は、母親が異常行動に対して緊張感を維持しながらケアを継続できた要因は、仲間との出会い、仲間との共感、仲間支持されたことによる自信であったとしている。以上のことから、精神障害のある当事者家族は、援助者でありながらも支援を受ける対象であり、セルフヘルプ・グループ等の仲間との関わりや家族以外の外部との継続的な交流が、家族自身の回復に大きな影響を与えるといえる。

2) 精神障害者のスティグマに関する先行研究

精神障害者のセルフスティグマについて、山口ら（2013）は、市民や専門職からのスティグマティゼーションとは、1）知識（無知）、2）態度（偏見）、3）行動（差別）の問題であるとし、精神障害者にとってのスティグマは、1）知覚されたスティグマ（**perceived stigma**）、2）経験したスティグマ（**experienced stigma**）、3）セルフ・スティグマあるいは内なるスティグマ（**self stigma or internalised stigma**）の3つの概念から構成されると定義している（図1）。スティグマが精神障害者に与える影響について、下津ら（2005）セルフスティグマを抱え続けることは、社会適応を阻み、患者の苦痛を増す結果となり、それゆえに患者自身の社会参加を阻む要因となり得るセルフスティグマへの対応が重要となってくるとしている。ヒーザー・スチュアートら（2015）は、自己スティグマは本人が否定的なステレオタイプを取り込み、自分が誰に対しても無価値な者であると感じた時に生じるということがあり、その結果として治療を受けたがらなくなり、希望や自尊心、自己肯定感、エンパワーメント、意欲などの低下をきたし、リカバリーは不良となり **QOL**（**quality of life**）は下がることを明らかにしている。さらに、家族や医療従事者等の精神障害に対する理解のなさ、差別、偏見がセルフスティグマを増強する要因に関わっている（嶋本ら 2014）ことが明らかにされているが、開示できる相手を適切に選び主体的に自己開示を行うプロセスが、セルフスティグマが低減することに繋がること（横山ら 2014）も示唆されている。一方、障害受容とスティグマの関連について、南雲（2002）は障害受容とは、自分の中から生じる苦しみの受容である自己受容と、他人から負わされる苦しみの受容、すなわち社会が障害者を受け入れるという社会受容からなるものであるとし、スティグマが障害をもつ人の社会的アイデンティティの形成に大きな影響を及ぼすとしている。以上のことから、精

神障害者にとってのスティグマは、市民や専門職から付与され回復に悪影響を及ぼし、セルフスティグマについては増強及び低減すると言える。さらに、障害受容とセルフスティグマの低減には、相通ずるものがあることが推測される。

図1 精神障害者に対するスティグマの構成要素



出典：山口創生 木曾陽子等（2013）『精神障害に関するスティグマの定義と構成概念：スティグマに関する研究の今後の課題』 大阪府立大学学術情報リポジトリ 社会問題

3) 家族のスティグマに関連する研究

家族のスティグマに関連する研究について、山本ら（2006）は、患者の現症や精神的健康と家族スティグマ（家族が持つセルフスティグマ）が関連しているとし、患者と家族が、ともにスティグマが低い場合に、幻覚・妄想が最も軽度であることを示唆している。さらに、家族内でのスティグマ認知（セルフスティグマ）が強いと、患者が自身の乏しい否定的自己像を形成する可能性があるとし、持続性の幻覚・妄想に対する治療では、本人への介入に加え、家族のスティグマ認知（家族のセルフスティグマ）が軽減するような心理社会的支援が重要であるとしている。一方、知的障害者家族が抱くスティグマ感の研究において、藤井（2000）は、親はこれまでの教育や社会体験から知的障害者観を形成しており、その障害者観は一般的にいて否定的であることが多く、1) 知的障害の告知のあり方が知的障害者の家族のスティグマ化に大きく影響する。2) 家族が子どもの知的障害を受容するには、スティグマ感を軽減する必要がある。3) 障害受容ができていないと、相談機関を訪ねる際にスティグマ感を持つ可能性が高いと整理している。さらに、藤井（2000）はスティグマ化の要因として①親の受けた教育や社会体験、②障害告知の際の配慮、③障害受容の困難性、④家族の孤立感（障害を知ったあとの心理的社会的支援の欠如）、⑤相談機関にかかわる人の態度のあり方、⑥周りの人の偏見が挙げられ、知的障害者およびその家族が、必要に応じてそのニーズに対応する社会福祉サービスを受けることができるようになるためには、上記①から⑥を一つ一つ取り除いていくことが必要であることを示唆している。一方、白石（2000）は、家族の障害者に対する受容過程を①衝撃期②否定期③憤怒期④不安定期⑤抑うつ期⑥取引期⑦受容期と7つの段階で示した上で、すべての家族が同様に経験するとは限らず、どこかの

段階で止まったり、循環していたりするものもあるとしている。さらに得津（2010）は、知的障害者の家族が、決して思い通りにいかない日常生活の現状を肯定的なものへと変換させる過程は、単に絶望から受容へと直線的に変化するのではなく、受け入れては、絶望し、落ち込んで、パワフル、ハイになり、という絶望と期待、安心立命と見果てぬ夢の繰り返しであると述べている。一方で、蔭山（2012）は、家族が精神障害者の家族がケアする経験の過程について国内外の文献をレビューし、家族がケアする経験の過程の段階と下位項目を比較し、分析の焦点が家族の経験全般である9論文のうち4論文以上に共通していた12の段階を抽出している。共通段階には「スティグマによる孤立などの困難」が、4論文で記載されていることが明らかになっている。以上のことから、障害のある当事者家族が抱くセルフスティグマは、当事者及び家族に孤立による困難をはじめ様々な悪影響を与えと言えし、家族の障害受容とセルフスティグマの低減には、相通ずるものがあることが推測される。しかしながら、精神障害のある当事者を持つ家族のセルフスティグマについて焦点を当てているものはない。そこで本研究では、精神障害のある当事者家族のセルフスティグマが低減するプロセスについて着目する。

4) 用語の定義

きょうされん（2010）の調べによると障害者の主な介護者として母親が64.2%と最も割合が高いことが明らかになっている。南山（2007）は、障害者-母親は、深い情緒的絆のもとに強固に結び付けられ、ケアに関する全責任が母親に課されることになるとし、父親は、このような強制の連鎖の外にあり、障害者のケアに積極的に関与しないことが許容され、稼得役割を担うことが父親の家族への責務の中心となるのであるとしている。さらに、川添（2006）は、家族の中心機能である出産、育児の主たる担い手は母親であり、母親は父親に比較して重要な役割を果たしている。両親と子どもの関係において、強調されるのは母親と子どもとの相互作用であり、問題が発生した場合に原因として責められるのも母親であることが多いとしている。以上のことから、本研究における家族の定義について、「精神障害のある当事者を持つ母親」とする。

セルフスティグマの定義について、Goffman（1963）は、「たとえば精神疾患患者の貞実な配偶者、刑余者の娘、肢体不自由児の親、盲人の友、絞首刑執行の家族は、みな彼らが関係しているスティグマのある人の不面目を引き受けることを余儀なくされている」としている。一方、Corrigan（1998）は、精神障害者のセルフスティグマについて「精神障害を持ったことを恥、批難、絶望、罪と感じ、そして差別への恐怖などを自己の中に内在化する」状態としている。以上のことから、本研究におけるセルフスティグマは、「自身の子どもが精神障害を持ったことを恥、批難、絶望、罪と感じ、そして差別への恐怖などを自己の中に内在化する状態」と定義する。

3 先行研究から明らかになった課題と研究の意義

1) 先行研究から明らかになったこと

先行研究の概観から、精神障害のある当事者に関するスティグマの研究は多くなされている。しかし、家族に関する先行研究については、生活者としての家族の視点をもった支援の必要性が求められており、家族のスティグマによる孤立などの困難が示されていながらも、セルフスティグマが低減するプロセスについての研究がなされていないことが明らかになった。

2) 研究の目的と意義

本研究では、精神障害のある当事者を持つ母親のセルフスティグマが、低減していくプロセスを明らかにすることを目的とする。この研究を行うことにより、精神障害のある当事者を持つ母親のリカバリー、すなわち母親が自分らしく生きることができるようになるための一助となりうる。さらには精神保健福祉分野における支援者が、このプロセスを意識して支援にあたることは新たな家族支援の一つになると考えられる。

4 研究方法

本研究における分析方法は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下 M-GTA) を採用する。M-GTA は、社会的相互作用に関係し人間行動の説明と予測に優れ、実践的活用を促す理論である。さらに、ヒューマンサービス領域で、対象とする現象がプロセス特性をもっている研究に適している (木下: 2003)。本研究では、精神障害のある当事者を持つ家族が抱くセルフスティグマが低減していくプロセスを明らかにするものであり、セルフスティグマは社会との相互作用によって影響を受けるとされている。本研究の目的に照らして、M-GTA は妥当な研究方法だと判断する。

1) 研究協力者と調査方法

研究協力者は、関東近県の精神障害者の家族会会員である母親で、かつ、公の場で実名を出し、活動を展開している方 5 名程度とする。研究協力者の希望する場所で約 60 分～90 分間の半構造化面接によるインタビュー調査を実施し、データ収集を行った。本調査は、所属機関である「大正大学倫理規定」を遵守して実施し、調査期間は、2020 年 2 月～2020 年 7 月とした。調査に入る前に、調査目的や意義、データの保管と破棄、IC レコーダーによる録音と音声データの取り扱い、調査結果の利用及び発表について事前に説明し同意書を取り交わした。

表1 対象者の概要（暫定）

	年代	当事者家族になってからの年数
A	70代	30年
B	70代	21年
C	70代	15年

2) 調査項目

本研究では、精神障害のある当事者を持つ母親が抱くセルフスティグマが低減するプロセスを明らかにする。この目的を踏まえ、母親が子どもの発病前から現在に至るまでの時間軸を基にして、インタビューガイドを作成し、それに沿って自由に回答してもらった（インタビューガイドは、当日提示資料に記載）。

3) 分析テーマへの絞り込み

「精神障害のある当事者を持つ母親の内なる偏見が低減するプロセス」

4) 分析焦点者

「精神障害のある当事者を持つ母親」

5 結果

結果図、ストーリーライン、分析ワークシート、コア・カテゴリー（当日提示資料を参照）。

6 分析を振り返って

1) オープン化

始めにデータ全体に目を通した際に、無意識のうちに類似例を検討してしまっていた。そのため一つ目の概念作成時、一つの箇所に着目した後に、類似例を検討してしまい、データとの対話が十分にできていなかった。この点について、指導教授よりヴァリエーションの中のデータを再度検討するようにとの指導を受け、分析テーマを意識しながら、解釈作業を進めた。着目したデータを簡単に類似例や対極例と判断せず、じっくりとデータと対話し十分に検討した上で概念の生成に心掛けた。

2) 収束化

概念の理論的飽和化が不十分なままカテゴリー作成の検討に入っていた。そのため、再度データに立ち返り解釈や概念名の再確認と修正を行っていった。

今後は対極例の検討が不十分な箇所があるため、新しいデータのオープン化をすすめ更

に検討していく。

3) 結果図作成

現象特性を意識しすぎてしまい、カテゴリー間の関係をみる視点が弱まっていた。そのため、概念間、カテゴリー間の関係を見るよう意識するよう心掛けた。

4) 疑問点

現段階では、家族会に参加することで、<3 孤立からの脱却>や<4 新たな発見>につながるという分析結果になっているが、すべての人が家族会に入ること、同様のプロセスをたどっているとは限らず、会の活動の中でも様々な相互作用の中で葛藤を経験し、それがセルフスティグマの低減に関係している点もあるのではないかという疑問を持った。この点に関しては、引き続き新たなデータも基にしながら、分析作業を進めていきたい。

7 研究の進捗状況と今後の計画

・指導教授による研究指導の回数と時期

指導の回数：月に 2 回程度。必要に応じて臨時の指導も受ける。

・研究計画書提出・発表の義務の有無

修士 1 年時にソーシャルワーク研究法の講義を通じて研究計画書を作成し、発表及び提出。年度末には研究経過報告書を提出。

・ゼミ発表や中間発表の回数と時期

年に 2 回、学内において研究経過報告会を実施。研究経過報告会前にゼミが開催され発表する。

・研究会や勉強会での発表の回数と時期

M-G T A 研究会の勉強会へは参加。自身の発表は無し。

・外部指導教員の活用の有無

無し。

・執筆開始の時期

現段階で、先行研究の章については作成済。9 月末から 10 月にかけて執筆を開始する予定。

<会場からのコメント概要>

《研究法の採用について》

・この研究は、M-GTA に適した研究であるか。KJ 法の方が適しているのではないか。セルフスティグマは認知なので、対人的な相互作用ではないのではないか。

《分析テーマの設定について》

・「セルフスティグマ」や「精神障害」とは何か。さらに焦点化が必要ではないか。

・現段階では「精神障害のある当事者を持つ母親の内なる偏見が低減するプロセス」となっているが、内なる偏見とは無意識的で内在化されたものである為、インタビュー対象者が言語化するのには難しいのではないかと。どちらかというと、内なるスティグマは、内に抱えながらその差別や偏見を受けた体験を母親がどう捉えて、医療者や当事者家族との関わりの中から社会との関わり方を母親なりにどう再構築していくというか、見つめ直していくプロセスなのではないか。

・現象特性でも示しているが、分析を進める中で、セルフスティグマは低減して終わりではないことがわかってきたのであれば、その点も含めて分析テーマを再検討していく必要がある。

・今の分析テーマが、精神障害のある当事者を持つ母親の内なる偏見が低減するプロセスとなっているが、例えば精神障害のある当事者を持つ母親が内なる偏見を低減させていくプロセスという設定の仕方もあると思うが、そうしなかった理由は何か。

・研究テーマ及び目的意義は、研究計画として自分の専門性の中に位置づけていくことは、有効だが、分析テーマに落とし込んでいくときの考え方は、自分の発想のギアを変える必要がある。偏見とかスティグマの経験はしている人もいるし、していない人もいる、つまり、経験に幅がある。強弱の変化もある。分析テーマ自体は両方向に見ていけるようなオープンな設定が良い。

《分析焦点者について》

・対象者家族の絞り込みについて、実際その当事者を支える家族というのは母親以外の存在もいる。その中で、ここであえて分析焦点者として母親に限定した理由は何か。

・家族会に参加していることというのが、方法論的限定にかかっているが、そこはあえて、意図的にそのセルフスティグマが低減しやすい対象を選んだのか。

・セルフスティグマから抜け出している人たちでないとプロセスの過程を明らかにできないので、方法論的限定としては意味がある。

・家族会の参加の有無によってプロセスに違いがあるかもしれないということであれば、分析焦点者についてさらに「家族会の会員である」という限定をかけておいた方が安全なのではないか。

《結果図について》

・内なる偏見が概念化されてどのように軽減していくのかというのが、正直言うとあまり見えなかった。内なる偏見というものを概念化して示していくよりは、この母親たちが語っているその現実体験や、経験の中から、子どもと障害を抱えながら地域で生活を新しく作っていくというか、というプロセスなのかなと感じた。

・「やじろべえ」のようにというところは、すごく大事な概念である。しかし、このプロセスはどちらかというと時系列で、説明されている。もう少し中核となる、その偏見や差別によって起きた体験を母親がどのように捉えているかというのを概念化し、セルフスティグマを増強させたり、低減していくという要因がどう関係しているのかを示していくと研究

結果に起因、関連する結果図になるのではないかな。

・この分析結果は、他の病気を持つ子どもの母親も同様のことが言えるのではないかな。精神障害のある当事者を持つ母親ならではの分析結果が出ると良い。

《分析ワークシートについて》

・現場で応用していくためには、どのような特性がこの人の心を動かしたのかというところに着目して、さらに具体的に検討していくと良いのではないかな。分析ワークシートの定義の欄には「家族会員」という言葉は入れない方が良い。

・相手との関係で何が起きているのか、それが母親にとってどんな経験になっているのかというところ見つめ直していけば概念がより統合されるのではないかな。

<感想>

この度は、貴重な発表の場をいただき、誠にありがとうございました。SVをご担当してくださった長山豊先生には、お忙しい中、懇切丁寧にご指導をいただき心より感謝申し上げます。SVでは、分析テーマが結果図と対応していないのではないかなというご指導を受けました。そこで、自身のこれまでの研究を振り返り、研究テーマに対する思い入れが強く、ほぼそのまま分析テーマに落とし込んでしまい、データに密着した検討ができていなかったということに気付きました。長山先生のご指導を受け、分析テーマに関するさらなる検討につながり、さらには視野狭窄に陥っていた状況から、自身の研究を一步引いたところから眺めることができたのではないかと考えております。

当日に、ご質問やご意見をいただいた先生方にも、心より感謝申し上げます。実際に質問を受け、頭ではわかったつもりだったことがうまく言語化できない場面もあり、理解や検討が不十分であったことを痛感いたしました。今後は、データとじっくり向き合いながら、分析テーマについて再度検討し、研究活動に取り組んでいきたいと存じます。

この度は、誠にありがとうございました。今後ともご指導の程、よろしくお願い致します。

引用文献

- ・ 古屋龍太 (2019)「精神障害者の親への支援の現状と課題—現行精神保健福祉法制を
変革する家族支援アプローチの可能性—」社会福祉研究 134 号
- ・ 佐藤純 (2006)「精神障害者家族への支援」教育科学セミナー
- ・ 下津咲絵、堀川直史、坂本真士、坂野雄二(2005)「統合失調症におけるセルフステ
ィグマとその対応」精神科治療学 20(5) ; 471-475
- ・ 半澤節子、中根允文、吉岡久美子、中根秀之 (2008)「精神障害者に対するスティグ
マと社会的距離に関する研究：統合失調症事例とうつ病事例の比較」精リハ誌, 12
(2) ; 154-162, 2008
- ・ 吉井初美 (2009)「精神障害者に関するスティグマ要因—先行研究をひもといて—」
日本精神保健看護学会誌 Vol.18 No.1

- ・ 関根正（2010）「精神障害者にとっての長期入院経験の意味—精神科病院における「スティグマ」付与の過程—」群馬県立県民健康科学大学紀要 第5巻：29～41
- ・ 林麗奈、金子史子、岡村仁（2011）「統合失調症患者のセルフスティグマに関する研究—セルフエフィカシー、QOL、差別体験との関連について」総合リハ・39巻8号・777～783
- ・ 山口創生、米倉裕希子、周防美智子、岩本華子、三野善央（2011）「精神障害者に対するスティグマの是正への根拠：スティグマがもたらす悪影響に関する国際的な知見」『精神障害とリハビリテーション』15(1), 75-85.
- ・ 山口創生 木曾陽子等（2013）精神障害に関するスティグマの定義と構成概念：スティグマに関する研究の今後の課題 大阪府立大学学術情報リポジトリ社会問題研究
- ・ 嶋本麻由、廣島麻楊（2014）「精神障害者が持つセルフスティグマを増強させる要因と軽減させる要因」京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要：健康科学
- ・ 山口創生、吉田光爾、種田綾乃、片山優美子、坂田増弘、佐竹直子、佐藤さやか、西尾雅明、伊藤順一郎（2014）「重症精神障害者におけるセルフスティグマと精神症状や機能との関連の検証：クロス・セクショナル調査」
- ・ 横山和樹、森元隆文、竹田里江、池田望（2014）「地域で生活する統合失調症をもつ人における自己開示とセルフスティグマ低減のプロセス」精リハ誌, 18 (2) ; 174-182
- ・ ヒーザー・スチュアートら（2015）「パラダイム・ロスト 心のスティグマ克服、その理論と実践」中央法規
- ・ 山田光子（2015）「統合失調症患者のセルフスティグマが自尊感情に与える影響」日本看護研究学会誌 38巻1号
- ・ 小松容子（2016）「精神障害者におけるセルフスティグマの克服を目指した援助—国内文献のレビューを通して—」第46回（平成27年度）日本看護学会論文集 精神看護
- ・ 長田恭子、福嶋杏子、三浦美香、河村一海、北岡和代（2016）「統合失調症者のセルフスティグマ形成から安定した地域生活へのプロセス」精リハ誌 Vol.20No.1
- ・ 吉井初美（2016）「精神障害者のセルフスティグマ低減を目的とした介入研究課題：レビュー」日本精神保健看護学会誌 Vol.25,No.1,pp.91～98,
- ・ 盛本翼、松田康裕、有田恵亮、岡西康治、田中尚平、杉本麻衣、寺田知恵子、岸本年史（2017）「心理教育が急性期統合失調症入院患者の知識およびセルフ・スティグマにおよぼす影響」精リハ誌, 21 (1) ; 62-66
- ・ 藤井薫（2000）知的障害者家族が抱くスティグマ感—社会調査を通してみたスティグマ化の要因と家族の障害受容—社会福祉学 第41巻第1号
- ・ 山本貢司、佐々木淳、石垣琢磨、下津咲絵、猪股丈二（2006）「統合失調症患者とそ

の家族におけるスティグマ認知 精神症状及び主観的ウェルビーイングとの関連」
精神医学・48（10）：1071-1076

- ・ 栄セツコ、岡田進一（1998）「精神障害者家族の生活上の困難さに関する研究」大阪
市立大学生生活科学部紀要・第46巻
- ・ 松田陽子・船越明子・木戸芳史（2019）「精神障害者の家族が受けるソーシャルサ
ポートと家族自身の人生に対する肯定的な認識との関連」『精神障害とリハビリテ
ーション』23（1），56-63.
- ・ 大島巖、伊藤順一郎（2000）「家族と家庭のケア力を強める」こころの科学 No.90／
3
- ・ 半澤節子（2005）「精神障害者家族研究の変遷—1940年代から2004年までの先行研
究」人間文化研究
- ・ 得津慎子（2015）「「全体としての家族」主体のソーシャルワーク実践における家族
レジリエンス概念導入の有用性」総合福祉科学研究 第6号
- ・ 得津慎子（2010）「知的障害者家族にみる日常生活を維持する力—M-GTAによるプ
ロセス研究」『関西福祉科学大学紀要』13，19-35.
- ・ 大田仁史＝監修 南雲直二＝著（2002）「リハビリテーション心理学入門—人間性
の回復をめざして—」荘道社
- ・ 白石大輔（2000）「ソーシャルワークリサーチからの報告 精神障害者への偏見とス
ティグマ」中央法規
- ・ 蔭山正子（2012）「家族が精神障害者をケアする経験の過程—国内外の文献レビュ
ーに基づく共通段階—」日本看護科学会誌 Vol,32,No.4.pp63-70
- ・ きょうされん（2010）「家族の介護状況と負担についての緊急調査の結果」
- ・ 南山浩二（2007）「精神障がい者家族と社会的排除 —社会的排除をめぐる二つの
規制—」家族社会学研究、18(2)：25－36
- ・ 川添郁夫（2007）「統合失調症患者をもつ母親の対処過程」日本看護科学会誌
- ・ アーヴィング・ゴッフマン著 石黒毅訳（2001）「スティグマの社会学 烙印を押さ
れたアイデンティティ」せりか書房
- ・ Corrigan,P.W.(1998)The impact of stigma on severe mental illness,Cognitive and
Behavioral Practice,5,201-222

【SV コメント】

長山 豊（金沢医科大学）

内野さんは、精神障害をもつ当事者の家族のセルフスティグマに焦点を当てたという点で、
先行研究の知見として少なく、社会的に意義深い研究であると思います。内野さんは、精神
保健福祉士として家族の方と関わっておられる中で、家族が精神障害に対する偏見や差別

を敏感に感じとり、適切なサポートに結びつかない事例を多く経験しており、問題意識を抱いておられます。また、精神保健福祉士の中でも、家族のセルフスティグマに対して援助の必要性に温度差があるという事を事前のSVで聞かせて頂き、専門職も家族のスティグマへの認知が進んでいない現状に対して、新たな問題提起および支援の必要性を訴える研究となると思いました。

まず、研究テーマの概念についてコメントいたします。家族のセルフスティグマという概念自体が、とても複雑な現象だと感じました。内野さんの研究では、家族＝母親として設定されています。母親のセルフスティグマとは何かについて研究会終了後に改めて考えてみました。セルフスティグマは「自己をスティグマの対象とし、価値の低いものとしてみなす」という点から、当事者を持つ母親自身が体験する（あるいは体験するであろう）偏見や差別への認識や感情は、当然含まれます。また、スティグマは差別（行動）も含まれるという点で考えると、母親が当事者や周囲の人々との精神障害に関する内容で交流することへの影響、専門職の支援を受けるための行動への影響などが生じます。そして、母親のみならず、当事者が地域社会から受ける偏見や差別に対して、母親がどのように受け止め、どのように感じているかという、当事者のスティグマに対する母親の認知や感情が影響します。さらに、母親自身がセルフスティグマを増長させることで、当事者に対するスティグマ（偏見や差別）を助長する可能性があります。私は、これらの認知・感情・行動の中核となる信念や価値、それも当事者にとって無意識的で実存的な意味がセルフスティグマの基盤となっているのではないかと考えます。M-GTAで理論生成するのは社会的相互作用の変容のプロセス、人間行動の説明と予測に関係している内容であることを前提に考えると、セルフスティグマそのものを研究対象とするならば現象学的アプローチの方が適しているのではないかと率直に感じました。

しかし、分析ワークシートや概念生成された概念名を見ていくと、現実社会における相互作用を通して、母親の生々しい体験が抽出されています。母親が一人で問題を抱え込まずおえない状況であったり、助けとなるはずの専門家から予想外の母親の気持ちを追い詰めてしまうような言動をかけられたりしています。その一方で、専門職・ピア（同じ当事者家族）・友人関係の中で、自分の気持ちを受け止めてもらえて安心したり、精神障害の開示への過度な心配が杞憂に終わった体験を通して認識の変容につながったりしています。リカバリーの考え方を借りれば、精神障害を持つ当事者を抱える母親が自分らしく社会の中で生活するための暮らし方を再構築していくプロセスのようにみえます。母親が地域社会の中で、社会的相互作用を通して体験してきたことをどのように意味付け、行動しているか、データに根ざして見つめ直すことで、分析テーマをデータにフィットした形で修正できるのではないかと考えます。M-GTAを用いて研究を行う上で、母親が地域社会から受ける眼差しの受け止め方・反応の仕方がどのように変容してきたのか、データから丁寧に解釈していくことが大事です。

また、結果図を見て感じたことですが、先行研究で明らかになっている知見に結果が引つ

張られているような印象を受けました。家族に精神障害を持ったことで家族は孤立したが、専門家やピアのサポートを受けてエンパワメントされ、差別や偏見がありながらも、視野が徐々に広がり、自分らしさを獲得していくプロセスが描かれていると、私は受け止めました。理想的なプロセスのように見えますが、実際には現実社会の無理解・偏見・差別は大きく変化しておらず、母親は精神障害を抱えた子と共に生きていく姿勢や態度を揺さぶられる体験を度々しているかもしれません。内野さんが概念化されている「友人関係における葛藤」の葛藤への折り合いのつけ方、「社会からの見方に揺らぐ感覚」の揺らぎ方がどのように変容しているのか、分析焦点者の視点から読み取り、概念生成および概念間の関係性を検討できれば、母親の体験に根ざした分析結果になると思います。

最後に、初めてのオンライン研究会という環境の中で、内野さんはとても落ち着いて丁寧に対応されており、参加者の皆様の貴重な学びにつながったと思います。研究発表に感謝申し上げますと共に、今後の研究の発展を切に願っております。

【第2報告】

山田美保（名古屋外国語大学大学院 国際コミュニケーション研究科 博士後期課程）

Miho YAMADA : Nagoya University of Foreign Studies, Graduate School of International Studies

日本語を主専攻とする台湾の大学生が日本語教師に期待すること－日本語教師との関係性形成プロセスから－

Ideal Image of Japanese Language Teachers for Taiwanese Students Majoring in Japanese Language -The process of building a relationship with Japanese teachers-

1. 問題意識の芽生え

現在、世界中には 3,851,774 人もの日本語学習者が存在している(国際交流基金 2018)。学習者の中には、日本国内で学習している者や国外で学習している者、さらには彼らの学習目的やニーズ、動機などは様々である。このような多様な学習者に対応するため、日本語教師はただ日本語を教えるだけでなく、時にはカウンセラーのような役割をしたり、コーディネーターの役割をしたりと、実に多くの役割を担っている。日本語教師の役割とは何なのか、日本語学習者は教師に何を期待し、教師はそれにどのように応えているのか、ということに疑問を抱いたのが、本研究を行おうと思ったきっかけである。筆者が日本語教師として働き出し、学習者との距離の取り方や、関係性について迷ったという自身の経験からこのような疑問が生まれた。誰もが一度は教師と出会い、その教師に対して「いい先生」「悪い先生」と評価しているはずである。このような漠然とした教師に対する評価をより具体的に明らかにし、学習者はどのように日本語教師と関係性を築き、それがどのように習得へと繋がっているのかを明らかにしていく。

2. 専門分野の先行研究との重なりと差異(問題意識の明確化)

《先行研究より》

・「優れた」日本語教師像に関する研究(国や文化による相違)

これまでの「優れた」日本語教師像に関する研究には、縫部・渡部他(2006)をはじめいくつかの研究が行われている。縫部・渡部他(2006)では、ベトナム、中国、タイ、韓国、台湾、ニュージーランドの大学生 1,441 名を対象として質問紙法によって調査を行い、「優れた」教師の行動特性を構成する概念を明らかにし、それぞれの国の特徴についても明らかにしている。5つの因子(「日本語教師の専門性」「指導経験と資格」「教師の人間性」「コース運営」「授業の実践能力」)はどの調査地でも同じであったが、どの因子を重視しているかといった考え方には調査地によって差があることが明らかにされている。

・「優れた」日本語教師像に関する研究(学習年数の長さによる相違)

上述の縫部・渡部他(2006)のように国や文化と関連付けて研究しているものの他に、学習年数の長さによる違いや、日本語専攻と非専攻による違いを明らかにした研究がいくつかある。学習年数によって日本語教師に期待するものは異なるのかということを明らかにした研究には顔・渡部他(2007)、佐藤・渡部(2007)、Ngan・小林(2009)が挙げられ、顔・渡部他(2007)では、台湾の5大学で日本語を専攻している大学生 633 名を対象に調査を行っている。その結果、学年によって教師に期待するものの考え方が異なり、それらは履修する科目や内容が要因になっているのではないかと考察している。例えば、3年生からは多様な科目も選択できるようになるため、他の学年に比べ学習者への配慮ができる教師や相談相手としての役割を教師に求める傾向があり、教師には人間関係構築力が必要になってくるとまとめている。

・「優れた」日本語教師像に関する研究(日本語専攻と非専攻による相違)

台湾における日本語専攻と非専攻による日本語教師に期待することの違いを報告した研究には、大学生を調査対象としているもの(顔 2007; 顔・渡部 2009)や、職業高校の学生を対象にしている黄(2015)などが挙げられる。顔(2007)の調査では、「日本語教師の専門性」のみ非専攻の学生の方が重視しているという結果で、考えられる要因として、カリキュラムや授業の性質、授業時間数の違いを挙げていた。

《問題の明確化》

このように先行研究では、アンケートを用いた量的研究で日本語学習者が考える優れた日本語教師の行動特性を構成する概念や、その概念が国や文化、学習年数、日本語専攻と非専攻によって異なるということを明らかにしたものが多い。学習者がどのようにその教師観を形成するに至ったかの過程や要因などは明らかにされていない。そこで、本研究ではインタビュー調査による質的研究で、台湾の大学の日本語学習者が日本語教師に期待することを明らかにしたいと考えた。

《本研究の目的》

本研究は、台湾の大学の日本語学習者が日本語教師に期待する行動特性を明らかにすること

を目的としている。「優れた」日本語教師像に関する先行研究には、量的研究が多く、学習者がどのように教師観を形成するに至ったかの過程や要因などを明らかにした質的研究は管見の限りない。学習者と日本語教師がどのような関係性を築いていくのかは、学習者の日本語習得にも影響を与える可能性がある。そのため、本研究では台湾の大学の日本語学習者が日本語教師に期待することを「関係性」に着目して探りたいと考えた。学習者と教師がどのように関係性を築いていき、日本語習得をしていくのかを明らかにすることは今後の日本語教育において、日本語教師にとっても学習者にとってもメリットであり、本研究の結果を実践に活用していくことができると考えられる。特に、台湾の大学における日本語教師一人一人が学習者とのインターアクションの取り方を考えるきっかけにしたり、実践の場で活用してほしいと考えている。

3. 方法論(M-GTA)決定の契機(問題意識の明確化)

- ①人間と人間の社会的相互作用のある分野
- ②プロセス性や“うごき”を説明する際に有効
- ③実践的応用の可能性がある

→ 日本語学習者と日本語教師との関係性形成にはプロセス性があり、どちらか一方ではなく相互の働きかけによって形成されていくものであると考えられる。さらに、学習者同士や台湾社会との相互作用も学習者の日本語習得に影響を与えていると考えられる。

→ 本研究結果を日本語教育の現場で応用していくことができる。

→ そのため、M-GTAによる分析を行うこととした。なお、本研究の分析過程では、2017年9月に開催された中部M-GTA研究会の分析ワークショップで指導、助言を受けた。これにより、本研究においてM-GTAを用いて分析することの妥当性や、分析の方向性を得ることができたと考えている。

4. 分析テーマの設定

分析テーマ：「日本語習得に役立つ、学習態度形成プロセス」

修士論文では、「日本語習得に役立つ、日本語教師との関係性形成プロセス」としていたが、今回のSVを受け、分析テーマを変更した。

日本語専攻という調査対象者の属性を考え、「日本語習得」が前提であると判断したため、「日本語習得に役立つ」という表現を用いた。最初は大学での新しい授業方法に戸惑い、否定的に捉えていたものを、肯定的に捉えるようになっていく日本語学習に対する学習態度がどのように変化していったのかを明らかにする。

5. 分析焦点者(or 分析ポイント)の設定

分析焦点者：「台湾で日本語を専攻していて、日本語を就職や進学で活用していこうと思っている大学4年生」

大学で日本語専攻でも日本語を使った仕事に就けるとは限らない。しかし、就職や進学で日本

語を活用したいという気持ちはあるのではないかと判断し、「日本語を就職や進学で活用していこうと思っている」という表現を用いた。さらに、4年生になって過去を振り返ったからこそ気づいたことがあるというのが、学習者の語りの中から見えてきたり、4年生だからこそ将来の話が出てきたりした。そのため、「大学4年生」という言葉も大切なキーワードになると考え、分析焦点者に入れた。

本データの一部を中部 M-GTA 研究会の分析ワークショップで提供した際、参加者の方々と一緒に、分析テーマ及び分析焦点者を設定した。それまでは、分析テーマが「台湾の大学生の(日本語)教師観形成プロセス」、分析焦点者が「台湾の A 大学日本語学科に所属している4年生」というとても広く、曖昧なものであった。分析ワークショップで決めてからは一度も変えず、実際の修士論文でも同じものを使って分析を進めた。

6. データ範囲の方法論的限定

本調査では、台湾にある A 大学で日本語を専攻している大学4年生6名に調査を行った。学習態度形成のプロセスに注目するため、日本語学習歴が長い4年生を対象とし、加えてインタビューであった筆者は中国語ができないということもあり、日本語でのインタビューが可能な程度の日本語能力を有していることを条件とした。

7. 現象特性の検討

現象特性がよくわからずに、そのまま分析を開始してしまった。

8. 対象者へのアクセスとデータ収集の展開

《対象者へのアクセス》

上に挙げた条件に合う調査協力者を、調査実施当時同大学日本語学科に所属していた4年生の友人から2名、4年生の授業を担当していた日本人教師からは4名紹介してもらった。調査協力者の特性は表 8-1 に示す通りである。

表 8-1.調査協力者の特性

	性別	学年	出身	日本語学習 開始時期	日本語 レベル	台湾以外での日本語学習歴
T01	男	4年生	台北	大学から	N 1	有 (栃木で1年間留学)
T02	女	4年生	台北	高校から	N 1	無 (ただし鳥取での研修と実習2回参加)
T03	女	4年生	宜蘭	大学から	N 2	無 (ただし鳥取での研修と実習2回参加)
T04	男	4年生	桃園	高校から	N 1	有 (京都の大学で1年間留学)
T05	女	4年生	桃園	高校から	N 2	有 (千葉の大学で1年間留学)
T06	男	4年生	台南	高校から	N 1	無 (ただし福岡での2週間研修参加)

* 日本語レベルは日本語能力試験 (JLPT) のレベル。N1～N5まであり、N1が一番上級である。

《データ収集の展開》

インタビューは1回のみで、その後追加で調査を行うことはしていない。それぞれ 30 分から1時間程度の半構造化インタビューを日本語で行った。実施時期は 2017 年3月9日から 15 日までの7日間で、それぞれ一対一のインタビューを行った。場所はいずれも調査協力者が通う大学構内で、会話はすべて録音し、その後文字化した。文字化資料は一人当たり約 10,000 字で、A4で約 15 枚分だった。この文字化資料をもとに分析を行った。

《調査項目・インタビューガイド》

調査協力者とは1名を除き初対面であったため、緊張を和らげる目的で、中心的質問に入る前に日本語学習歴や訪日経験などについて尋ね、話しやすい雰囲気づくりに努めた。主な話題は、①「日本語の学習」、②「訪日経験や普段の日本語使用など」、③「日本語教師」、④「印象に残っている先生(日本語教師に限らず、今まで出会った先生の中で)」、⑤「将来やその他」であった。②からは徐々に調査目的に関係することを聞いていったのち、中心的话题である④について掘り下げた質問をするようにした。⑤ではインタビューの終結部として将来の話や今日の予定など調査とはあまり関係のない質問をいくつか行った。

9. 初期の分析ワークシート作成とバリエーションの選択

- ・ディテールの豊富なデータ(T06)から分析を始めた。1人目の分析が一番時間がかかった。2人目以降は1人あたり3、4日間かけて分析を進めた。
- ・何度も印刷した文字化データを見ながら、そこに手書きで気づいたことを書いていった。
- ・その後、大事な箇所を抜き出して、概念になるかを検討した。メインの指導教員とは別に、質的研究をしている先生に指導してもらっていたため、その先生と面談をして、概念生成を助けてもらった。
- ・その中でも、コアとなりそうな概念を見つけて、そこから繋がるように概念を生成していった。しかし、最初に分析を始めたときは、高校までの教育から大学入学、そして卒業前の4年生という時系列になってしまっていた。どうしても時系列のようなまとめ方になり、なかなかうまくまとまらなかった。
- ・バリエーションの中に対極例も書いていたが、最終的にはそれが独立して新しい概念になっていた。

今思うと、肯定⇔否定というように(以下の旧概念例参照)、対極の概念生成をしてしまったことが失敗だったと思っている。

《旧概念例》

「暗記型授業 肯定」 ⇔ 「暗記型授業 否定」

- ・さらに、SVを受け、概念名がただの事実の羅列になっていることに気づき、変更した。“そのとき分析焦点者はその事実をどう捉えたのか！”これを表す概念名にしなければならないことを学んだ(以下の概念例参照)。

《概念例》

概念名:「インターアクションのある授業」

定義:インターアクションのある授業では、能力向上ができていい授業だと感じていること。

変更後:「インターアクションによる多様なアイデア」

10. 分析テーマの修正／データ範囲の確認

・中部 M-GTA 研究会の分析ワークショップに参加するまでは、分析テーマが「台湾の大学生の（日本語）教師観形成プロセス」、分析焦点者が「台湾の A 大学日本語学科に所属している4年生」だった。とても広く、曖昧なものであったため、参加者の方々と一緒に決め直し、分析テーマを「日本語習得に役立つ日本語教師との関係性形成プロセス」とした。その後は一度も変えず、実際の修士論文でも同じものを使って分析を進めた。

・今回 SV を受けて、日本語教師と学習者の関係性についてはあまり見えていないことに気づき、分析テーマをさらに修正し、「日本語習得に役立つ、学習態度形成プロセス」とした。

11. オープン化における困難・工夫

・分析を進めていくと、視点がぶれてしまうことが一番大変だった（分析焦点者と分析テーマは WS で決めてからは一度も変更していない）。

ぶれてしまわないように分析ワークシートが一番上（ヘッダー）には分析焦点者と分析テーマを書いていたが、それでもずれていることがあった。分析焦点者が“学習者”の視点だったにも関わらず、自身の“日本語教師”という立場に引っ張られ、何度も概念生成をやり直した。気づかぬうちに視点が変わってしまっていることがあり、他者に言われるまで気づかないこともあった。

・概念名や定義も分析焦点者の立場からではない書き方になっている部分があったので、修正したこともあった。

《再検討例》

最初の分析では「対応」という表現を使っており、視点が教師になっているため、分析焦点者である学生の視点に変え、「教師の対応」と変えた。しかし、これでもまだ分析焦点者の視点に立っていないと今回の SV を受けて気づいたため、視点の転換および学生の気持ちを表す名前に変更した。

〈学生一人一人にあった対応〉 → 〈学生に適した教師の対応〉 → 〈歩幅を合わせてくれる安心感〉

・理論的メモは、必ず「なぜここに着目したのか」を書くようにしていた。始めは何を書けばいいのかわからずあまり詳しく書いていなかったが、分析の最後の方には特に細かく書いていた。小さなことでも気になったことは記入し、日付もつけるようにしていた。統合したものや修正したものも記入していた。

・コアやカテゴリー級の大きな概念、つなぎになりそうな概念など気づいたことも理論的メモに頻

繁に書いていた。手書きで書くときは日にちで色を分けて、ぱっと見てもすぐにわかるように書いていた。

12. 現象特性の再検討

「教師のサポートの仕方ewith変わる学習態度」

・いまだに現象特性についてわかっているようでわかっていないような感覚のままである。教師の適切なサポートが学習態度形成に大きな影響を与えていると考え、それを表すような現象特性にした。

13. 収束化への移行

- ・最初は、収束化の意味がよくわからず、新しい概念がたくさんできてしまった。もう一度木下先生のご著書を読んで、大事だと思って作った概念も、2人目以降に出てこなければ最初の人に特有のものだから概念にはならない、というところを見て、勇気を持って概念を捨てることも大事だと思った。その作業をして収束化にもっていくのが大変だった。
- ・概念間の関係を考えながら統合したり分けたりという作業を繰り返した。そこで似たような概念があることに気づいた。
- ・概念名だけ変えたり、定義だけ変えたりという細かい作業も行っていた。
- ・追加のデータを取る時間もなかったなので、とりあえず6名全員分が終わった時点で、まとめる作業に入った。

14. 結果図の作成(収束化における困難・工夫)

- ・概念生成が終わってからというより、概念やカテゴリーを生成しながら、頭の中でなんとなく図ができていた。それをまずは手書きで書いていった。概念生成をしながら、この概念は結果図のどのあたりに位置するのかを考えていた。
- ・しかし、矢印を書いて左から右に流れるという書き方が時間軸に沿っているようになってしまい、失敗したと気づいた。
- ・その後、結果図は何度も書き直し、これが一番わかりやすいと思い修士論文を提出したが、現在もう一度見ると、とてもわかりにくく、プロセスが全然見えてこない結果図になってしまった。

15. ストーリーラインの作成と結果図の修正(収束化における困難・工夫)

- ・結果図が終わってから、図を見ながら作成した。
- ・ストーリーラインはA4一枚以内が望ましいとされているため、短くしようと努力した。説明することに集中すると長くなってしまい、短くまとめるのが大変だった。
- ・生成した概念とカテゴリーを使って文章を書くというのも難しかった。どうしても余分な説明が入ってしまい、それが長くなってしまう原因だったと感じている。
- ・「ストーリーラインを作成することは、自分が理解したと思っていることと、それを文章化して他者

に伝えることの大切さにも関係し、非常に重要な作業である(木下 2003)」とされているが、指導教員にストーリーラインを見せた際に、この大変さを痛感した。「自分が理解したと思っていること」を言語化して発信してみると、本当は理解できていなかったと気づくことがあった。

* 分析ワークシート例、結果図、ストーリーラインは共有画面参照

16. 今後の研究の発展

今回の調査では、事前に自分が聞き出したいことをじっくり考えることなく急いでインタビューを実施してしまったため、明らかにしたいことと聞いたことの間にずれがあったように感じている。今後は、視点を変え、今あるデータから見えてくることを分析してみたいと考えている。投稿論文の形にし、台湾の大学で日本語を学習している学習者や、日本語教師に活用してもらえるような、具体的でわかりやすい結果を提供したいと考えている。

★指導教員による研究指導の回数と時期

メインの指導教員とは別に、インタビューの章は質的研究をしている先生に指導してもらっていた。一緒に M-GTA について勉強し、一緒に分析を行った。指導は月に数回で、多いときは週に何度かしていた。

★研究計画書提出・発表の義務の有無

研究計画書は1年に2度(学期ごとに)。外部での発表の義務はなし。

★ゼミ発表や中間発表の回数と時期

ゼミという形ではなかったが、メインの指導教員とも月に1、2度のペースでは会っていた。学内全体の間接発表は年に2度(9月と2月)で、在籍中に合計4回。

★研究会や勉強会での発表の回数と時期

中部 M-GTA 研究会の分析ワークショップでデータ提供を行った(2017 年9月(2年生の時))。

★外部指導教員の活用の有無(ある場合は回数・時期)

なし

★執筆開始の時期(目次、序論、方法、結果、考察、結論、文献リスト等)

調査実施時期(アンケート) : 2016 年 12 月～2017 年3月

調査実施時期(インタビュー) : 2017 年3月(7日間)

分析方法決定 : 5月ごろに決め、勉強を開始した

分析開始 : 2017 年夏頃～ 途中9月に中部の分析ワークショップに参加し、方向性が固まった

本格的に分析を開始したのは 11 月ごろからで、12 月中旬から下旬にかけて集中して行った

分析終了 : 2018 年1月上旬まで続いた

修士論文提出 : 2018 年1月 15 日

研究背景や先行研究、アンケートの章は先に書き上げ、インタビューの章は提出の直前に書

き始めた。1月に入ってから何度も分析のやり直しをしていたため、なかなか執筆に取り掛かることができなかった。

17. 参考文献： 先行研究とともに、M-GTA の方法論および研究例として参考にした文献

- 顔幸月(2007)「台湾の大学生が考える「優れた」日本語教師の行動特性に関する調査」『東呉日語教育學報』30, 1-25, 東呉大學日本語文學系
- 顔幸月・渡部倫子・小林明子・縫部義憲(2007)「台湾の大学生が求める日本語教師の行動特性—日本語専攻の場合—」『日本語教育』133, 67-76, 日本語教育学会
- 顔幸月・渡部倫子(2009)「台湾の大学生が求める日本語教師像—日本語専攻・非専攻による相違—」『東呉日語教育學報』33, 1-23, 東呉大學日本語文學系
- 木下康二(2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い—』弘文堂
- (2007)『ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて—』弘文堂
- 黄国維(2015)「台湾人学習者に求められる理想の日本語教師像についての一考察—ある職業高校の日本語学習者を対象に—」『東呉日語教育學報』44, 101-124, 東呉大學日本語文學系
- 国際交流基金(2018)『海外日本語教育機関調査』URL
<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2018/text.pdf>> (閲覧日:2020年8月10日)
- 佐藤礼子・渡部倫子(2007)「アジア5カ国・地域の学習者が求める日本語教師の行動特性—学習年数による相違—」『留学生教育』Vol.12, 1-7, 留学生教育学会
- Do Hoang NGAN・小林明子(2009)「日本語学習者が考える「優れた」日本語教師像に関する研究—ベトナムの大学生を対象として—」『国際協力研究誌』15 巻, 1-2 号, 65-74, 広島大学大学院国際協力研究科
- 縫部義憲・渡部倫子・佐藤礼子・小林明子・家根橋伸子・顔幸月(2006)「日本語教師に必要な特質・資質に関する国際調査」『日本語教員養成における実践能力の育成と教育実習の理念に関する調査研究平成16年度～平成17年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書』(研究代表:中川良雄, 課題番号:16320068), 94-117.
- Moskowitz, G.(1976)Competency-Based Teacher Education: Before We Proceed. *Modern Language Journal*, Vol.60, Issue 1-2, 18-23.

4. 会場からのコメント概要

<分析テーマについて>

- ・なぜ「日本語教師との関係性形成」から「学習態度形成」にしたのか。研究の芽生えでも学習者と教師の関係性について知りたいと言っていたのに。
- ・「学習態度」とは？学習態度にはいろいろな側面があるが、この研究ではどういう意味で用いているのか。

- ・分析をしながら見えてきた(付随した)ものではなく、元から設定していた「学習態度」は何だったか。

〈分析焦点者・対象者について〉

- ・なぜ台湾の大学生を対象にしたのか。
- ・大学から日本語学習を始めた人と、高校から学習している人がいるが、その差は考慮しなくても大丈夫なのか。
- ・分析焦点者も対象者もブレている。自分の立場がはっきりしていないため、対象者についても、焦点者についてもまとまっていない印象を受ける。
- ・応用したいのは「教師」なのに、分析焦点者は「学習者」。教師には二次的に結果を提供できるかもしれないが、学習者にこの結果を伝えるのもいいのかもしれない。
- ・教師に応用して欲しいと考えているのに、なぜ教師を対象者にしなかったのか。
- ・大学4年生というのはインタビューをした人というだけで、分析焦点者には要らないのではないか。

〈データの取り方について〉

- ・準備不足であった点。インタビューガイドをしっかり作らないでインタビューを実施してしまい、聞きたかったことが聞けていなかった。
- ・もしかしたら、聞きたいことが無意識に聞けているかもしれないため、もっと細かく見ていくといいかもしれない。

〈結果について〉

- ・台湾の大学生ならではの概念はどれか。
- ・この研究の新たな知見は何か。
- ・結果図に社会的相互作用が何も見えていない。教師だけではなく、学習者同士や家族、社会などいろいろな相互作用があるはず。それも概念やカテゴリー化していくといい。

〈今後について〉

- ・このデータを使う：データに戻って、分析テーマと分析焦点者を変える。
- ・新しくデータを取り直す：その際は分析焦点者を学習者にするか教師にするか考えてから。
- ・「学習へのドロップアウト」についてフォーカスを当てるのもいいかもしれない。それによって、自分の研究で助けたい人が明確になってくる。

5. 感想

今回の発表は、私にとってとても貴重な経験となりました。このような機会がいただけたことに感謝いたします。木下先生をはじめ、コメントをくださった多くの先生方、そして何より一番はSVをくださった林葉子先生に感謝の気持ちでいっぱいです。

林先生はお忙しい中でも、多くの時間を私に費やしてくださり、とても親身で、寄り添った指導をしてくださいました。林先生は答えを教えるのではなく、私が自分で気づけるようにヒントをくれ、気づかせるようなご指導でした。そのおかげで、約1週間という短い期間でしたが、いろいろなことに気づくことができ、多くのことを学びました。

分析やり直しの期間は大変でしたが、それ以上に、「M-GTA の分析が楽しい！」と感ずることができました。それは、やっと M-GTA について少しだけわかってきたからだと思います。今までは基本的なことすらわかっておらず、本を読んでなんとなくわかったつもりで分析を進めていました。しかし、今回の林先生の適切なご指導によって、やっと本当の M-GTA がわかってきました。概念名を考えている中で、初めて「これかも！」と思える自分の中でしっくりくる概念名が作れたときには、嬉しさのあまり、林先生にすぐにメッセージを送ったりもしました。こんなに分析が楽しいと思えたのは初めてです。分析の楽しさを教えてくださった林先生、本当にありがとうございました。

木下先生がくださったコメントのとおり、アドバイスをもらうと素直にそれを受け入れてそちらに傾いてしまうのが私のいけないところだと思います。なので、これからはいただいたアドバイスを一度自分の中で咀嚼して、よく考えてから取り入れるようにしたいと思っています。M-GTA での分析に限らず、いろいろな場面でもその姿勢を忘れないようにしていきたいです。

今後は、このデータについては、もう一度データに戻って、そこから明らかにできることは何かを考えたいと思っています。そして投稿論文の形にしたいと考えています。さらに、このデータとは別に、自分の研究目的が明らかにできるように、研究デザインを見直し、新たにデータの取り直しも行いたいと思っています。

今回いただいたこの経験が無駄にならないように、できることを精一杯やっていきたいです。皆様、本当にありがとうございました。今後とも、ご指導よろしくお願いいたします。

【SV コメント】

林 葉子 ((株) JH 産業医科学研究所)

1. 目的と研究テーマ、分析テーマ、M-GTA との適合性について

山田さんの研究テーマは、「日本語を主専攻とする台湾の大学生が日本語教師に期待すること—日本語教師との関係性形成プロセスから—」というご研究で、学生と教師の関係性に主眼を置いた研究はほとんど見当たらない上に、学生に研究視点を置いた意義のあるご研究です。質的研究をなさっている教師に師事して分析したということでしたが、ほぼ、独学で修論を仕上げられたとのことで、大変、努力なされたあとが散見されました。

M-GTA の方法は、頭の中では理解していらっしやいました。そのことは、分析までのプロセスや分析プロセスからも見ることができました。一方で、研究を実施するまでの期間が短く、インタビューガイドの準備も念入りにできなかったのもあり、フロアからいろいろと指摘されたように、その後のデータ分析の課題は、そういった準備不足に凝縮されてしまった感がありました。研究計画や、調査にいたるまでの準備は、調査に逸る気持ちを抑えて十分

に練る必要性は、どのような研究においても重要だと、会員の皆様にも理解していただきたい点です。

分析テーマについては、指導教官などの大学の先生や、中部 M-GTA 研究会でのデータ提供、そして、今回の SV に関しても、それらのアドバイスを受けて錯綜気味になってしまいました。最後の木下先生のコメントにあったように、アドバイスや SV を受けたときには、良く咀嚼して、研究者自身が選択するかどうかを判断する必要があるということは、スーパーバイザーとしてもよく心得ていなければならなかった点だと思っています。フロアからご意見がありましたように、山田さんが本当に興味を持っていることは、「教師と学生との関係性」であることでした。時間があれば研究者自身が、データにもどり、何を明らかにしたいのかについてデータから得られるかどうか、研究者自身の思い込みではなく、データ・オンの分析とは何かについて気づくこともできたのではないかと思います。

概念生成については、ご本人も気づいておられましたが、概念の主人公（主語）は分析焦点者であることを忘れないようにしなければなりません。分析時点でも、山田さんご自身が日本語教師であったことから、どうしても視点が教師目線になってしまいがちであったので、分析ワークシートの余白に、分析テーマと分析焦点者を記しておきましたが、なかなか難しかったようです。SV では、その点を主に指摘して、概念名を再考していただきました。また、相互作用も学生と教師間の相互作用にとらわれすぎて他の相互作用への気づけず、概念生成がなかったことも初学者ならではのことでですので、今回、短い SV で気づいてくださったことは、山田さんの努力のたまものだと思っています。

今回の研究会では調査前の準備がいかに大切であるかということが実際の例から理解でき、意義のあるご発表だと思います。準備において、何を確認していったのかを押さえていくこと、また、分析テーマ、分析焦点者をよく考えて決めていくことがとても重要であることがわかって、聴取者の方々にとっても大変勉強になったのではないのでしょうか。

2. 今後の指針

木下先生もおっしゃっていましたが、今後は、“データありき”を重視して、まずは、これまでのデータをよく読み込み、何が言えるか、このデータから何が明らかにすることができるかという分析テーマを落とし込み、分析焦点者、つまり、誰のための研究かを見定めて、分析を始めていくことが必要でしょう。最初の分析のように、時系列にならないように気をつけながら、分析ワークシート作成時に、概念間の関係性（プロセス）を一つの概念を生成するときにも考え、理論的メモに記していくという作業をしてみましょう。概念生成時の気づきについてはメモに書くことを心がけていращやるので、そこに、プロセスやプロセスにおける概念の位置づけについても、メモに書いていくように意識して分析してみてください。概念生成は一気にしていくのは良いのですが、焦らずに慎重に。センスはもっていращやるので、必ず、良い分析結果が得られると期待しております。

とても、有意義な研究ですので、めげずに、どうぞ、がんばって分析を続けてください。

◇近況報告

(1) 氏名、(2) 所属、(3) 領域、(4) キーワード、(5) 内容

(1)山本江里子

(2)東京女子医科大学看護学部

(3)母性看護学・助産学領域

(4)若年女性、月経異常、尺度、婦人科受診

(5)はじめまして。今迄、月経痛のある若年女性のセルフケア尺度について博士課程で研究してきました。

研究経過の中で、月経痛が強い人ほど、セルフケアができていないという結果が出たため、現在は、セルフケアでは月経痛が緩和できない月経異常がある若年女性の使用できる尺度を作成している途中です。日本は、未婚の若年女性は婦人科受診も低率で、10代から20代の月経異常を放置していることで、機能性月経困難症から器質性月経困難症に移行している場合が増えています。

そこで、月経異常がある若年女性と婦人科受診との関連も探っていきたいと考えています。

*ロジャーズの概念分析を使って、概念を作成する過程にあります。日本語版で概念分析の良い書籍がございましたら教えて頂けると幸いです。

.....

◇次回のお知らせ

2020年11月14日(土) 第90回定例研究会

時間：13:00～16:30

場所：オンライン (ZOOM 開催)

.....

◇編集後記

新型コロナウイルスの世界的パンデミックにより様々な社会活動が停止し、新たな生活様式を余儀なくされている現状です。M-GTA研究会においても感染防止対策として、研究会の開催がオンラインとなりました。初めてのオンライン開催でしたが、みなさまいかがでしたか。北海道から九州まで広い地域から124名という多くの方の参加で、これもオンライン効果では？と思っているところです。大きなトラブルもなくスムーズに会が進行しました。準備を進めてくださった修士論文発表会担当の世話人の先生方、ありがとうございました。

2つの発表をとおして、「研究テーマ」の絞り込みの重要性、「分析焦点者の設定」につ

いて、参加者の方も理解が深まったのではないのでしょうか。毎回の研究会でもこの 2 点に関しては、繰り返しディスカッションされるところです。他の人の研究発表を聞いているとわかって、いざ自分の研究となると難しいものです。ぜひ、研究会で発表されることをお勧めします。オンラインではなかなか手を挙げづらいかもしれませんが、たくさんの質問が出ることで参加者の方々の理解も深まっていきます。次は勇気を出して、手を挙げる機能をポチっとしてください。(唐田順子)